



INFOS

日仏整形外科学会広報誌 **アンフォ**

■会長 … 七川 敬次
Président : K. SHICHIKAWA

■副会長 …… 菅野卓郎 小野村敏信
Vice-Président : T. SUGANO T. ONOMURA

■書記長 …… 小林 晶
Secrétaire général : A. KOBAYASHI

■書記・会計 …… 瀬本喜啓 大橋弘嗣
Secrétaire et Trésorier : Y. SEMOTO H. OHASHI

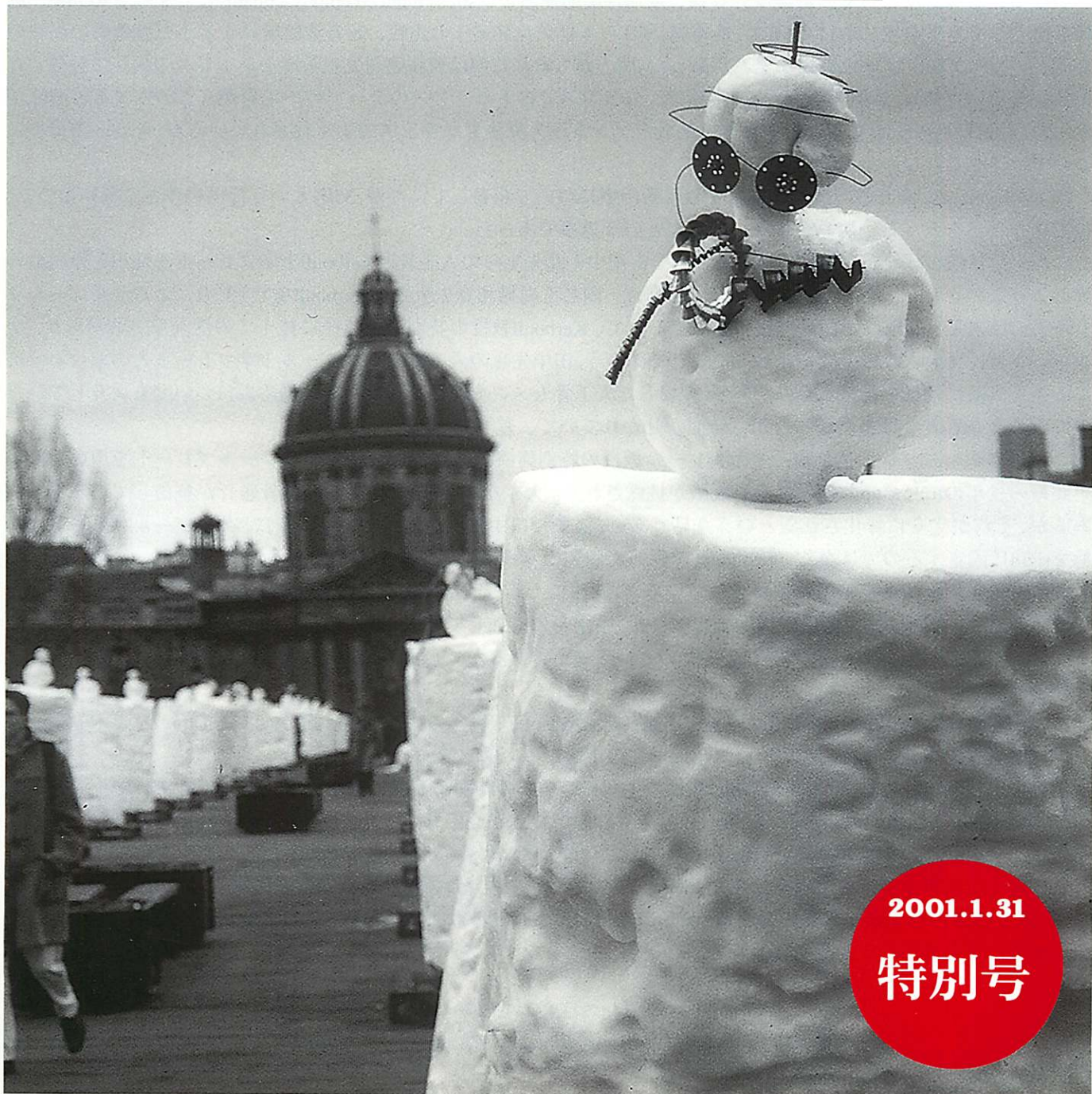
■事務局 : 〒 569-8686 大阪府高槻市大学町 2-7 大阪医科大学整形外科学教室内
Tel. (0726)83-1221 代表 (内)2364 Fax. (0726)82-8003

Bureau : Dept. of Orthopaedic Surgery, Osaka Med. College, Takatsuki, Osaka 569-8686 JAPON

■発行所 : 〒 545-8585 大阪市阿倍野区旭町 1-4-3 大阪市立大学医学部整形外科学教室 (編集者 : 大橋弘嗣)
Tel. (06)6645-3851 Fax. (06)6646-6260

Maison d'édition : Dept. of Orthopaedic Surgery, Osaka City Univ. Med. School, Abeno-ku, Osaka 545-8585 JAPON (Éditeur : H. OHASHI)

■ホームページアドレス : <http://www.osaka-med.ac.jp/~ort000/SOFJO>



2001.1.31
特別号

▲Pont des Artsに並べられた雪だるま達 (Paris)

フランス医学の醍醐味を味わう

七川 歆次

日仏整形外科学会は会員の先生方の献身的な努力に支えられて、順調に回を重ねてきた。今回は第9回を迎え、その成果が一層発揮されてきていたように思える。一般演題の数も多く、モンペリエの病院での研究報告や日仏交換研修医 (A. Rochwerger) の発表もあり、多彩で活潑な日仏整形外科学会であった。

一般演題のセッションでは、田中晴人先生らの“Die Punch”損傷 (第4報)、門野邦彦先生の歩行時前足部荷重分布の仕事、手術治療としての遊離皮弁移植、変形性関節症およびstress induced epiphyseopathyに対する骨切り術、画像診断として脊椎病変におけるMRI、筋電図、CTミエログラフィーの比較、超音波断層による小児膝蓋骨の高さの評価といったアップデートで有用な発表があった。関心をもたれたのは遠藤建司先生らのモンペリエの病院で経験した内視鏡を用いた第1、2腰椎圧迫骨折の手術で、フランスでのトピックスのテーマの一端を窺うことができ興味深かった。骨粗鬆症の圧迫骨折に対する経皮的骨セメント注入療法もフランスでよく行われているが、それとの得失については述べられなかった。

Dr Rochwergerは後天性内反母趾に対する手術治療について発表していたが、35例という症例の多さに驚いたので、後でそのことを云うと、関心が少ないからだという返事であった。

この一般演題のsessionの白眉はなんといっても田中千晶先生らの人工骨とKerboull十字プレートを使用した臼蓋再建およびこのプレートの力学的特性に関する研究、同じく高橋和寛先生らのKerboull-KT (田中によるケルブールプレートの改良型) を用いた臼蓋再建の発表であって、Kerboull教授の特別講演を後に控えての活潑な討論があり、ケルブール教授は大きな満足感を味わったことであろう。田中先生の人工骨とケルブール十字プレートとの組み合わせによる手術成績には目を見張るものがある。充填した人工骨セメント塊に見られた亀裂様陰影についても言及していたのでその存在意義を尋ねたかったが、時間がせかれていて、差し控えた。

この後コーヒーブレイクを挟んでケルブール教授の特別講演があり、allograftとケルブールプレートを用いた臼蓋再建術の長年のfollow upの優れた手術成績が披露された。大きなallograftが使えるのは骨銀行が整備しているからであるが、それが完全に骨化されるという意見であった。また田中先生が述べていたように、ケルブールプレートは骨盤をrigidに固定するのではなく、resiliencyを保った固定で、移植骨の生着に有利である。

ケルブール教授は度々日本に招待されているが、関西にくと旧友の堺在住の長田明先生のことを知りたがり、会いたいという。今回は長田先生が横浜までこられ、本学会に参加していて、彼にとっては最良の一日となったのではないかと。彼は弟子達にきびしく、気むずかしいということであるが、今回のいかにも嬉しげな彼の容貌からは窺うことはできない。

この後清重佳郎、川崎拓、青木清三先生の帰朝報告があつて、例年の如く面白く聴かせてもらった。青木先生はフランス整形外科学会のboursierであり、1年間滞在の中のひろい話しであった。

最後的小林晶先生によるLeopold Ollier教授の生涯についての特別講演は、医学史学会会員でもある先生の、本格的な、精細にして格調の高いもので、本当に息を呑む思いで聞きかされてもらった。おそらく余人にはできないと思われた。フランス医学の醍醐味を存分に味わわせて (私は酔わせて) もらった感じであった。

このような見事なプログラムを企画し、実行できたのは、本学会会長坂巻豊教先生の見識と力量によるもので、敬服し、厚く感謝の意を表するものである。日仏整形外科学会はすぐれた人材を擁し、21世紀に向って更に発展するバネを秘めた学会であることを痛感した。

第9回日仏整形外科学会を開催して

坂 卷 豊 教

平成12年11月25日(土)、パシフィコ横浜において第9回日仏整形外科学会を開催させていただきました。本学会はフランスの整形外科を理解し友好を深めることに関心を持つ者の集まりですが、これを機会にさらに多くの人にフランスの整形外科の良さを体験していただきたいことを第一に考え、多くの雑誌等に広報をお願いしました。平成12年秋に関東で行われる整形外科関係の学会は日本小児整形外科学会であり、同時開催となるよう11月25日に日程を設定しました。ゲストには瀬本喜啓先生、田中千晶先生のお力添えによりパリ大学コシャン病院Kerboull教授をお迎えすることができました。一般演題には当初の予想を上回る13題が集まり、主催者として大きな喜びでした。なお参加者は約80名でした。

一般演題の多くは30歳から40歳代前半の新進気鋭の医師によるもので、英語または仏語によりpresentationが行われました。最近の学会・研究会はほとんどが器官別になっており、大きな学会でも同一種類の演題でsessionが組まれるのが常識化しています。一會場で種々の口演を聴くことができることは非常に新鮮であり、そのせいかhotなdiscussionがかわされました。どの演題も単なる臨床発表ではなく基礎的な裏付けを伴った内容であり、新しい診断法や治療法に関するものもあって評価の高いものばかりでした。フランスで得た体験が大いに役立っていると思われました。Kerboull十字プレートに関する演題が3題ありましたが、このプレートの正しい使い方を再確認する上で大いに参考になったほか、優れた成績があらためて示されました。

休憩の後、Kerboull教授による特別講演が行われました。人工股関節再置換術に際して臼蓋再建用に作られたオリジナルのプレートと同種保存骨を用いた方式を多数の臨床例を示しながら熱のこもった講演をされました。私はコシャン病院における同種保存骨を用いた再置換術の長期成績にはかねてから感銘をうけており、今回の内容にあらためて敬意を表したいと思います。帰朝報告は山形大学清重佳郎先生、滋賀医科大学川崎拓先生、岡山大学青木清先生の3人から行われ、それぞれの病院での手術風景や病院スタッフとの交流の様子を興味深く拝見することができました。各人がそれぞれ努力されて貴重な体験を得たこと、交換留学制度が確立したものになっていることをあらためて知ることができました。本学会の交換留学制度は我が国整形外科関連の中ではすでに整備されたものでありますが、日本側の研修制度もさらに充実したものとしたいことを強く感じました。貴重な経験をされた先生方はそれを後輩に引き継ぐことができるよう努力していただきたいと思います。

特別講演の2番目として小林晶先生から「Leopold Ollier教授の生涯」の講演がありました。平成12年6月にフランス、アルデーシュ県のレヴァン (Les Vans) において故Leopold Ollier教授の没後百年記念学会に出席され、彼の生地であるレヴァンの紹介を含めて骨膜の意義や関節形成術などの見事な業績を詳細に解説してくださいました。オリエール病の名にも引き継がれているように彼の業績は偉大でありましたが、同時に先人の仕事を大切に引き継ぎ、誇りとするフランス医学の立派さを感じないわけにはいきませんでした。

演題数が多かったことに加え、多くの質疑応答がありましたが予定通り6時40分に終了し、引き続き隣室で懇親会を開催しました。Kerboull教授から日本側のhospitalityに対する感謝の気持ちが述べられ、恐縮したとともに彼の実直な人柄をうかがうことができ印象的でした。参加者全員が和気あいあい楽しく過ごし8時30分散会しましたが、通常の学会では味わうことのできない良い雰囲気でした。終わりに座長の労をおとりいただいた先生方、パピヨンとしてお手伝いいただいた方々に厚く御礼申し上げます。来年5月には大阪でAFJOが開催されます。盛会となりますよう、また本学会が一層発展しますよう協力したいと思います。

第9回 日仏整形外科学会

9ème Réunion de la SOFJO

2000年11月25日(土)午後1時30分より

パシフィコ横浜 4階

●学会参加費 3,000円 ●特別講演1,2とも日整会研修単位各1単位(1は日整会リウマチ単位としても1単位)として認定されています

I-1 開会の辞 Opening Address —————〈13:30~13:35〉—————坂巻豊教 T. Sakamaki

-2 挨拶 Greeting Message —————七川歎次 K. Shichikawa

II. 一般演題(1) —————〈13:35~14:30〉—————座長 田中千晶/清重佳郎
Chairman: C. Tanaka/Y. Kiyoshige

1. 遊離皮弁による下肢皮膚軟部組織欠損の再建

Reconstruction of Soft-tissue Defects in the Lower Extremity with Free Flap.

谷口泰徳 Y. Taniguchi, 玉置哲也 T. Tamaki

和歌山県立医科大学整形外科 Department of Orthopaedic Surgery, Wakayama Medical University

2. “Die Punch”に合併する月一舟状骨骨間靭帯断裂

Avulsion of Scapholunate Interosseous Ligament (SLIL) associated with “Die Punch”

田中晴人 H. Tanaka, 山下信哉 *N. Yamashita

九州看護福祉大学 The Kyushu University of Nursing and Social Ware

*九州大学第一解剖学教室 *1st Anatomy, Fukuoka University

3. F-scanを用いた歩行時前足部荷重分布の検討

Pressure Distribution under the Forefoot during Walking.

門野邦彦 K. Kadono

奈良県立医科大学整形外科 Department of Orthopaedic Surgery, Nara Medical University

4. 変形性足関節症に対する下位脛骨骨切り術の適応と限界

Low Tibial Osteotomy for Primary Osteoarthritis of Ankle.

田中康仁 Y. Tanaka, 高倉義典 Y. Takakura, 門野邦彦 K. Kadono, 谷口 晃 A. Taniguchi

奈良県立医科大学整形外科 Department of Orthopaedic Surgery, Nara Medical University

5. 長期の繰り返すストレスによる骨端症に対する骨切り術

Osteotomy for Repetitive Stress Induced Epiphyseopathy in Adolescents.

清重佳郎 Y. Kiyoshige

済生会山形病院整形外科 Department of Orthopaedic Surgery, Saiseikai Yamagata Hospital

6. 頸髄症例でのMRIの輝度変化と筋電図における高振幅電位との比較検討

Comparative Study between Intensity Change in the MRI and Neurogenic Patterns in the Erectromyographies in Patients with Cervical Myelopathy.

鳥飼英久 H. Torikai, 村山憲太 K. Murayama, 袖山智典 T. Sodeyama, 畠山健次 K. Hatakeyama,

*村上正純 *M. Murayama

国立習志野病院整形外科 Department of Orthopaedic Surgery, Narashino National Hospital

*千葉大学整形外科 *Department of Orthopaedic Surgery, Chiba University

7. 頸椎、腰椎病変の評価におけるMRIとCTミエログラフィーの評価

A Comparison of MRI and CT-myelography in the Evaluation of Cervical and Lumbar Lesion.

檜木 茂 S. Hinoki, 藤田拓也 T. Fujita, 松本忠美 T. Matsumoto

金沢医科大学整形外科 Department of Orthopaedic Surgery, Kanazawa Medical University

一般演題(2) —————〈14:30~15:20〉—————座長 瀬本喜啓/柳本 繁
Chairman: Y. Semoto/S. Yanagimoto

8. 超音波断層法による小児の膝蓋骨の高さの評価

Ultrasonographic Measurement of the Patellar Position in Children.

藤原憲太 K. Fujiwara, 土居宗算 M. Doi, 瀬本喜啓 Y. Semoto, 中島幹雄 M. Nakajima, 小野村敏信 T. Onomura, 阿部宗昭 M. Abe

大阪医科大学整形外科 Department of Orthopaedic Surgery, Osaka Medical College

9. 内視鏡を使用した第1, 2腰椎圧迫骨折の手術経験

Direct Approach to L1, L2 Vertebrae under Video-associated Endoscopy.

遠藤健司 K. Endo, 武田祐介 Y. Takeda, *T. Marnay

東京医科大学霞ヶ浦病院整形外科 Department of Orthopaedic Surgery, Tokyo Medical University Kasumigaura Hospital

*Clinique du Parc (France Montpellier)

10. 人工骨とKerboull十字プレートの力学的特性

Acetabular Reconstruction with Artificial Bone and Kerboull-Type Cross Plate.

田中千晶 C. Tanaka, 四方実彦 J. Shikata, 池永 稔 M. Ikenaga, 高橋 真 M. Takahashi, 三原一志 K. Mihara, 大西宏之 H. Onishi, 竹本 充 M. Takemoto, 小島 央 H. Kojima, 野澤 聡 S. Nozawa

京都市立病院整形外科 Department of Orthopaedic Surgery, Kyoto City Hospital

11. Kerboull十字プレートの力学的特性

Physical Properties of Kerboull-type Cross Plate.

田中千晶 C. Tanaka, 四方実彦 J. Shikata, 高橋広幸 *H. Takahashi, 上野辰雄 *T. Ueno, 松下富春 *T. Matsushita

京都市立病院整形外科 Department of Orthopaedic Surgery, Kyoto City Hospital

12. Kerboull-KTプレートを用いた臼蓋再建の経験

Acetabular Reconstruction with Kerboull Cross Plate and KT Plate.

高橋和寛 K. Takahashi, 安永裕司 Y. Yasunaga, 生田義和 Y. Ikuta, 中村精吾 S. Nakamura, 久留隆史 T. Kuru

広島大学整形外科 Department of Orthopaedic Surgery, Hiroshima University

13. Acquired Hallux Varus: Surgical Management in 34 cases.

Alexandre Rochwerger MD.

♪♪休憩 —————〈15:20~15:40〉—————

Coffee Break

III. 特別講演(1) —————〈15:40~16:50〉—————

Special Lecture (1)

座長 坂巻豊教

Chairman: T. Sakamaki

Acetabular Reconstruction with Allografts and Metallic Armature in Revision Surgery.

"Technique and Long Term Results"

Professor M. Kerboull

IV. 帰朝報告 —————〈16:50~17:30〉—————

司会 大橋弘嗣

Chairman: H. Ohashi

1 清重 佳郎(平成11年度)

Y. Kiyoshige

山形大学整形外科

Department of Orthopaedic Surgery, Saiseikai Yamagata Hospital

2 川崎 拓(平成11年度)

T. Kawasaki

滋賀医科大学整形外科

Department of Orthopaedic Surgery, Shiga Medical College

3 青木 清(留学の思い出)

K. Aoki

岡山大学整形外科

Department of Orthopaedic Surgery, Okayama University

V. 特別講演(2) —————〈17:30~18:30〉—————

Special Lecture (2)

座長 小野村敏信

Chairman: T. Onomura

Leopold Ollier教授の生涯

Life of Professor Leopold Ollier

小林 晶

A. Kobayashi

VI. 総会 —————〈18:30~18:40〉—————

VII. 閉会の辞 Closing Address —————〈18:40~18:45〉—————

菅野卓郎 T. Sugano

VIII. 懇親会 Banquet —————〈18:45~20:30〉—————

「Kerboull先生と私」

京都市立病院

整形外科

田中 千晶 先生

最初にお会いしたのは1989年の秋、Kerboull教授のInterne（研修医）に対する講義の時でした。講義の内容は人工股関節の臨床の一般的なものでした。立位長尺のレ線フィルムをはっきり覚えています。Bichat病院で苦勞を共にした友人のPascalがKerboull教授の存在を教えてくださいました。日本を離れる前はKerboull教授の名前すら知りませんでしたし、当初の私の留学予定にもありませんでした。

「フランスの文化を学べ」

そもそもフランスへ留学するきっかけとなったのは大学院在学中にBichat病院のDuparc教授の山室教授訪問でした。Duparc教授は当時SICOTのフランス代表で山室教授が日本の代表だった頃です。私がDuparc教授夫妻を京都案内した際に教授は私がフランスに留学するなら給費の可能性を探すと教えてくださいました。結局フランス政府の給費とCollège de Médecine des Hôpitaux de Parisの給費を提示され、運良く両方とも受けました。しかしあいにく両者を同時に受けることはできないと言われ、後者を選びました。給費額が前者に比べてずっと良かったからです。しかしInterneの職を行うことが条件でした。もちろんそんなフランス語力があつたわけではありませんが、Duparc教授は楽観的な人で3か月間Alliance Françaiseへ通えばやってゆけると教えてくださいました。現実にはカルテの書き方、手術記事、何よりも週に1回の当直が私にとって大きな試練であり、時として脅威でした。幸い、Duparc教授の親分気質と周囲の人々の厚意と、日本人に対する興味のおかげで何とかやってゆけました。給費は1年契約でしたから2年目は予定外でしたが、山室教授の推薦で上原財団の給費を頂いたので自由に行き先を選択できました。もともと山室教授にフランス留学を準備するよう言われた時の大学院時代の私は米国へ行こうと考えていました。「フランスで何を勉強するのですか？」とお尋ねした所、山室教授のお言葉は「フランスの文化を学べ」

という大人（たいじん）の言でした。研究は日本の方が進んでいるから国際性を身に付けよということだと思います。フランス文化を学ぶにはDuparc教授ほどふさわしい方はいないと思いました。

当時Duparc教授の教室ではDouble Cup ArthroplastyのRevisionが多く、Interneの仕事のかたわら白蓋再置換の臨床研究というテーマを頂きました。これを契機にヨーロッパで種々の再置換法に接したことが股関節にのめり込むきっかけとなりました。親友のCCA (chef de clinique) のPascalがCochin病院にKerboullという偉大な股関節外科医がいることを教えてくれたのはその頃でした。

Kerboull教授に最初にお会いしたのは先にも述べたように講義の時でした。私はこの人があの十字プレートを作った人かと甚く感動しました。もちろんその時はDuparc教授の所において次の行き先を決めていなかったのですが、彼の講義を聞いて私は確信しました。しかし紹介されていたわけでもないのだから何とか話すきっかけを作ろうと思い、講義中に必死の思いで質問しました。それも下手なフランス語で。一瞬全員の注目を浴びたのを覚えています。質問の内容も教授の返答も覚えていません。その時のKerboull教授は「なんだこの東洋人は」といった顔つきでした。講義が終了してからKerboull教授に自分はDuparc教授の所でInterneをしている日本人で、来期は是非先生のところで勉強したい旨を話しました。もちろん紹介状もないころです。Kerboull教授の返事は「よいけれど給費はだせないよ」でした。熱烈歓迎とは言えないけれども、私にとっては明日が開けたと思える出来事でした。

どこの国でもあることですが偉大なPatron同士はかならずしも親友とは限りません。その当時Cochin病院Service AのChefは股関節評価点で有名なPostel教授でした。もう1年Bichat病院で働かないかというDuparc教授に私は勇気を振り絞ってCochin病院へゆきたいと言いました。すると教授は「Postelは親友だから彼に紹介状を書いてあげよう」と教えてくださいました。これだけでも大



◀ Kerboull先生

きな厚意でしたが、それでも私はKerboull教授（当時Service BのChef）の所へ行くことにこだわりました。結局Postel教授のretireの時期であったため、Kerboull教授（Service AのChefへ移動）のもとへ行くことになりました。

■ 真摯なフランスの精神

Bichat病院からCochin病院へ移ったのは1990年の2月だったと思います。Kerboull教授の教室には真摯なフランスの精神が生きているように思いました。例えばPasteurやEiffelの様な。これはMerle d'Aubigné学派の精神なのでしょう。地味ながら堅実なL'Ecole pour les patientsと言えます。毎朝カンファランスに遅刻する者もなく、昨日から今朝までに行われた手術患者のレ線写真が次々と並べられ、何ら「へま」が無いことが確認されて1日が始まります。術前のカンファランスには麻酔科医と精神科医が必ず出席し（これは大変意味があると思う）、それぞれの患者の治療が再検討されます。個々の患者が次々と会議室に呼ばれ、スタッフ全員の前で診察されます。検討が行われた後にKerboull教授がConclusionsを朱筆されます。カルテは必要十分なシンプルなものです。彼の教室は全てが整理され、organizeされて進行します。多くのフランス人は日本では全てが整然と問題なく進行すると考えているが、私から見れば彼の教室ほど整然と仕事が進行するところはないように思えました。ストライキ以外は。

Kerboull教授は仕事に対しても厳格な論理の人であり、教育者としても一流であると思います。その教育とは根っからの教育者のそれではなく、彼が実証済みの確実な真実のみを求める者にのみ教えるやり方です。Interneとして回って来る者の中には出来の良い者とそうでない者がいます。出来の悪いInterneは勉強もしてこなければ注意深く観察することもしない。時としてKerboull教授は彼らに厳しく、手術室では恐ろしい教授の一人です。彼の教育には適する者と適しない者がい

ると言えるかも知れません。良い質問には大変細かく解説してくれるすばらしい教育者です。彼の教育者としての信念のひとつに初めから懇切丁寧に教育しようということは無駄であるといった考えがあるのではないかと私には思えます。どんなに詳しく説明しても解らない者はあくまで理解せず、優秀な者は説明しなくても観ているだけで自然に理解するからである。整形外科医に向かない者は他を選んだ方が良くと言っているのかもしれませんが。今はチューリッヒの肩関節の大教授になっているCh.Gerberは若い頃にしばらくKerboull教授のもとで勉強した時のことをKerboull教授とスタッフに話したことがありました。皮膚を両側からふたりに縫ってゆくとKerboull教授はGerberの縫った糸を黙って切ってゆき、自ら縫い直してゆきました（よくあることですが）。若き日のGerberはKerboull教授にどうしたらうまく皮膚が縫えるのか尋ねました。Kerboull教授は「私のようにしなさい」と言っただけでした。それが彼の教育でした。

■ 立派な整形外科医は完璧主義者

全ての立派な整形外科医は完璧主義者であると思います。Kerboull教授はその典型です。彼の手術はArtというにふさわしい。白蓋の形成にはノミを使い、リーマーを全く使いません。移植骨はぴったり合うように形成され、全く無駄の無い手術をされます。白蓋にしるDouble Femur Graftにしるその形成技術はミケランジェロと言えはおおげさでしょうが、世に整形外科医は大工と言う人がいますが、Kerboull教授の場合は彼の技術と科学的センスからしてScientist-Artistと言うべきでしょう。Scienceのsenseは的確です。彼の人工股関節CMKや十字プレートがその最たるものです。日常生活の中でも彼の観察眼は鋭くScienceのsenseに満ちています。料理の素材、味覚に至るまで。このコーヒーを1杯入れるのにコーヒー豆をどれだけ使うかということから人文科学的観点まで種々に及びます。例えば「日本



◀田中千晶先生（左）

の天皇や将軍の肖像がすべて坐像であるのはなぜか？西洋では王や皇帝の肖像はほとんど立位か騎馬像であるのに。」といった具合である。大変博識であるのには驚かされます。私にとって教育者としてのKerboull教授の忘れられない言葉があります。日本へ帰国直前に「帰ってから困った事があったら相談にのってくれますか？」と尋ねる私に、「よろしい。しかし、もし君が十分にintelligentであれば自然に一人で解決法を見出すであろう。」と彼は答えました。彼自身一人で解決法を見つけてきた人だからです。

彼は自分の人工関節の成績に自信を持っているからでしょうが、私がCochin病院にいる1年余りの間に短期間ずつのいろんな教室を訪問することができました。Endoklinik (Hamburg)、Charles Engh (Arlington)、Henri Dejour (Lyon)、MarseilleのLouis等々である。フランス人には考えられないような知的に贅沢な勉強旅行でした。私はとりわけDejour教授（小林先生の親友で不幸にして数年前に逝去された。）の仕事に感銘を受けました。特にTrillat以来の臨床例を正確に分析したPatellaの不安定性の研究は目からうろこが落ちる思いでした。私の勉強旅行の報告をCochinの有名な講堂でスタッフ全員の前で行いました。Kerboull教授はそれを聞いて基本的研究姿勢はCochinの姿勢と全く同じであると語られたのを今でも覚えています。

■ 名前を刻んで頂いた白蓋用ノミ

私はKerboull教授を3度も京都に迎えて、1度は殿筋内脱臼の人工股関節手術を手伝って頂いたことを真に誇りに思っています。彼が私に贈ってくれたCahier d'Orに私のことをfils spirituel（精神的息子）と書いて下さったことは身に余る光栄であると思っています。人工股関節全置換術をやるときはいつも使う白蓋用のノミはKerboull教授が帰国の際に私の名前を刻んで贈ってくれた私の宝です。しかしそれを使った後にリーマーを使います。その時に「パパには内緒だよ。」と言いながら

リーマーを使う彼の息子のLuc（すばらしい整形外科医である）の言葉を思い出します。そして私はつぶやくのです。「ごめんなさいMon père spirituel」と。

追記

昨年の第9回日仏整形外科学会では会長の坂巻先生をはじめAFJOの諸先生方のご厚意でKerboull教授を三度京都へお招きできたことを心より感謝申し上げます。



◀懇親会であいさついただいた小野村先生

第6回日仏整形外科合同会議開催のお知らせ

6 ème Réunion de l' Association France Japon D' Orthopédie 第6回日仏整形外科合同会議(略称:第6回AFJO)を下記のごとく開催いたします。

使用言語は英語ですが、フランス語の発表も歓迎します。フランスのトップレベルの整形外科医が来日されます。アングロサクソン系とは一味違った医学を是非御経験下さい。

日 時 2001年5月11(金)、12日(土)

場 所 大阪国際会議場(グランキューブ大阪)
Osaka International Convention Center
〒530-0005 大阪市北区中之島5丁目3番51号
Tel. 06-4803-5555 Fax.06-4803-5620

会議の内容 5月11日(金) 開会式、特別講演、
ラウンドテーブル
5月12日(土) 一般演題、閉会式、懇親会

使用言語 英語、日本語、仏語

後援機関 日本整形外科学会、日本手の外科学会、
フランス整形災害外科学会

演題の締切 2001年3月15日

●発表を希望される方は、日本語(400字)と英語(200語)、
または日本語(400字)と仏語(200語)の抄録を下記事務局まで
お送り下さい。

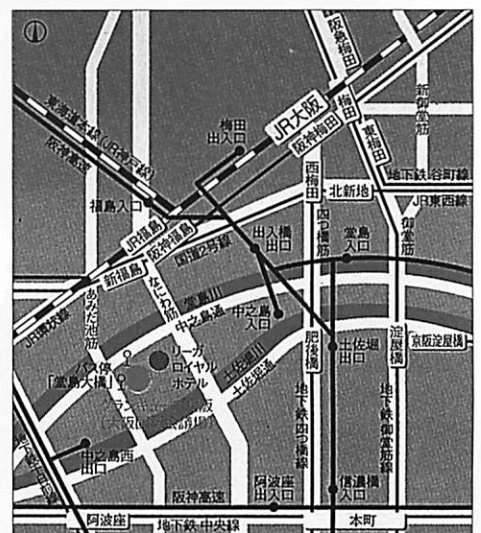
なお、演題の採否は議長にご一任ください。

E-mailでも受け付けますが、文字化けする場合がありますので
御希望の方はE-mailで事務局までお尋ね下さい。

第6回日仏整形外科合同会議

議長 小林 晶(福岡整形外科病院理事長)

第6回日仏整形外科合同会議 組織委員会事務局
大阪医科大学整形外科学教室内
〒569-8686 大阪府高槻市大学町2-7
TEL 0726-83-1221 内線2364または2442
FAX 0726-82-8003 (係:瀬本喜啓)
E-mail ort003@osaka-med.ac.jp





▲La Tour Eiffelと雪化粧をしたTrocadero (Paris)

フランスの冬



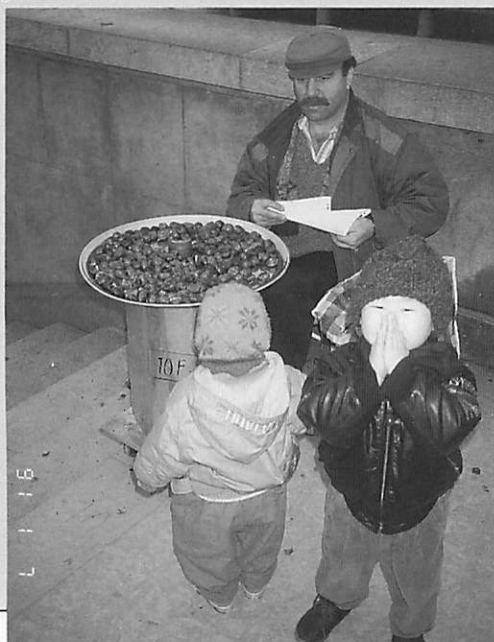
▲にわとりで有名なBourg-en-Bresseの教会



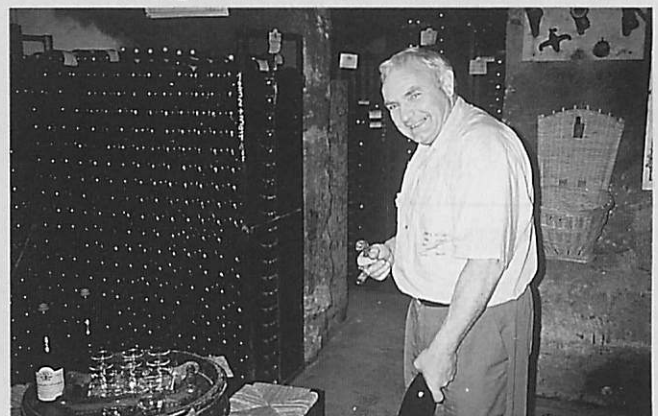
▲Avignonの橋、Le Pont St-Benezet



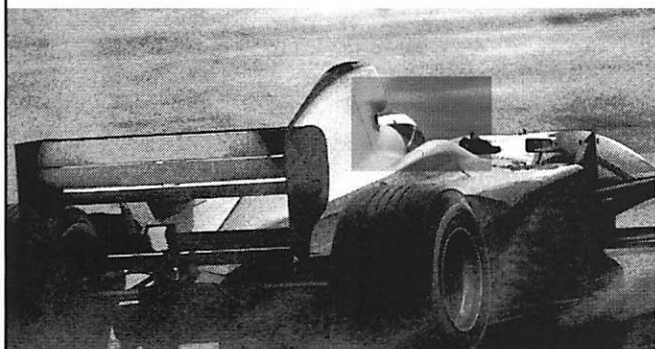
▲Van Goghの絵のモデルとなったAuvers sur Oiseの教会



▲冬の名物、街頭の焼き栗売り (Paris)



▲Morey-St.-Denisのワインカーブ (Bourgogne)



アレルギー症状からの解放、 それ以上をめざして・・・

アレルギー性疾患治療剤

指定医薬品 要指示医薬品 (注意-医師等の処方せん・指示により使用すること)

新発売

allegra® **アレグラ®錠 60mg**

塩酸フェキソフェナジン製剤 ●薬価基準収載

【禁忌(次の患者には投与しないこと)】
本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

【効能又は効果】

アレルギー性鼻炎、蕁麻疹

【用法及び用量】

通常、成人には塩酸フェキソフェナジンとして1回60mgを1日2回経口投与する。なお、症状により適宜増減する。

【使用上の注意】(抜粋)

●重要な基本的注意

本剤を季節性の患者に投与する場合は、好発季節を考慮して、その直前

から投与を開始し、好発季節終了時まで続けることが望ましい。

●相互作用

併用注意(併用に注意すること):制酸剤(水酸化アルミニウム・水酸化マグネシウム含有製剤)、エリスロマイシン

●重大な副作用

ショック…ショックを起こすことがあるので、観察を十分に行い、呼吸困難、血圧低下、血管浮腫、胸痛、潮紅等の過敏症状があらわれた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

★その他の使用上の注意等の詳細は現品添付文書をご参照ください。

★資料は当社医薬情報担当者にご請求ください。

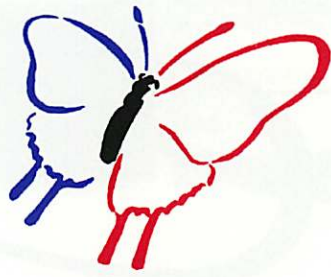
2000年11月作成 ALE-JA4(B①-2)0011-MD

製造・販売:

アベンティス ファーマ株式会社

〒107-8465 東京都港区赤坂二丁目17番51号

1995



THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS

THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS

THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS

THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS